

現代青年の規範意識と私生活主義について

久世敏雄 和田実¹⁾ 鄭暁齊²⁾
浅野敬子³⁾ 後藤宗理⁴⁾ 二宮克美⁵⁾
宮沢秀次⁶⁾ 宗方比佐子⁷⁾ 内山伊知郎⁸⁾
平石賢二²⁾ 大野久⁹⁾

問題

青年期において人は自己の意識、態度、価値観などを明確化する。そのなかでも特に、社会的な関心が高まり、社会事象に対する判断や評価をする。これが社会意識といわれるものである。このような社会事象に対する意識や態度は明らかに時代的な影響を受けるものと考えられる。

われわれは、これまで風間・秋山(1981)、宮島(1976)、田中(1976)、吉田・荒井(1982)などの研究を参考に、青年の社会意識を規範意識と私生活主義という2つの側面からとらえてきた(久世ほか, 1987)。そこでの規範意識とは家庭や学校、社会における対人関係などにおいて、多くの者によって共有されている伝統的・慣習的な言動についての基準や習慣などに対する意識をさし、一方、私生活主義とは「私」の生活と利益を重視しようとする生活の構えであり、自分自身や身近な事象への関心、それとは逆に社会的な事象への無関心、自分の感覚や実感の重視、自分の欲求と利益の重視などをさした。因子分析を行なった結果、私生活主義は「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」

の2つの側面に分かれた。また、各下位尺度の得点を検討したところ、規範意識はほぼニュートラル・ポイントであり、身近な事象への関心・社会的な事象への無関心はニュートラル・ポイントを下回っており、自分の感覚や実感の重視は5段階尺度で4点を越えていた。すなわち、現代青年の特徴として自分の感覚や実感を非常に重視しているのが明らかにされた。

以上のように、この枠組みが現代青年の社会意識の特徴をとらえるのに有効であることが示された。しかし、はたして自分の感覚や実感をこれほどまでに重視しているといえるのかどうかという疑問が生じる。また、私生活主義の概念化にあたり無力感、見通しの無さ(なりゆきまかせ、安易への傾斜)というものが欠けていたように思われる。そこで、本研究は私生活主義の概念の一部を修正し、他の項目も若干かえ、同じような結果が得られるかどうかを性別や在籍する学校による相違から確認するのを目的とする。

なお、それぞれの修正した概念の具体的内容は以下の通りである。

(1) 規範意識

規範は、多くの者によって共有されている価値基準とその実現のためにとられるべき行為の様式をさす。その規範が内面化されたものが規範意識である。

(2) 私生活主義

①自分自身と身近な事象への関心・社会的な事象への無関心：私生活の充実(享樂的生活)、私的人生観(趣味に生きる、のんびりした暮らし)、居心地の良さ(快適さ、身のまわりの充実)、他者への関心の低さ、かかわりの拒否、社会的政治的無関心(自分の生活にかかわらないことに対して)、無力感、見通しの無さ(なりゆきまかせ、安易への傾斜)などをさす。

②自分の感覚や実感の重視：自分の感情の重視(好き嫌いの重視、自分のありのままの気持ちの表出)、人と

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
(現所属 東京学芸大学教育学部)
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
- 3) 中京女子大学家政学部
- 4) 名古屋市立保育短期大学
- 5) 愛知学院大学教養部
- 6) 名古屋経済大学経済学部
- 7) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
- 8) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
(現所属 静岡県立大学短期大学部)
- 9) 新潟青陵女子短期大学

同じことをしない（目立ち、個性の尊重）、権利・自由の主張（他人の犠牲にはならない、個人の利益の主張）、個人の尊重（他人からの干渉を嫌う）、利己主義的（人は人、自分は自分、他人の事は気にしない、人に煩わされない）などをさす。

方 法

1 調査項目の作成

(1) 調査A

久世ほか（1987）で用いたものであり、規範意識20項目、私生活主義28項目からなる。評定は、「非常に賛成」（5点）～「非常に反対」（1点）までの5段階評定である。なお、得点が高いことはその意識や態度が強いことを示す。

(2) 調査C

問題で述べた規範意識および私生活主義の概念定義にしたがって作成されたものであり、規範意識が16項目、私生活主義が29項目—自分自身と身近な事象への関心・社会的事象への無関心が14項目、自分の感覚や実感の重視が15項目—からなる。評定法と得点の意味するものは、調査Aと同じである。

2 調査対象

調査Aについては表1に、調査Cについては表2に示した。なお、同一大学名の被調査者には、両方の質問紙に回答してもらった。同一大学名で調査Aと調査Cの被調査者数が若干異なるのは、両者の関連をみる際に、いずれかの質問紙に欠損値のある者はすべて除いたためである。すべて4年制の大学であり、A大、T大、G大、S大、C大は私立大学、N大は国立大学である。また、T大とS大は女子大学である。

3 分析方法

調査A、調査Cともに、作成した調査項目が私生活主義および規範意識を測定する項目として、適切であったかどうかをみるために、分析対象者全員について因子分析（主因子解、バリマックス回転）を行なった。その後、特定の因子にのみ高い因子負荷量を持つ項目に基づいて尺度を構成し、各尺度の信頼性および尺度間相関を算出した。

結 果

1 調査Aについて

48項目について因子分析を行なったところ、3因子構造をなしていると考えられた。また、各項目のそれぞれの因子への負荷の様子は、久世ほか（1987）の大学生に

表1 被調査者の内訳（人）

男	N大	312	557
	G大	245	
女	N大	91	245
	S大	154	
		計	802

表2 調査Cの被調査者の内訳（人）

男	G大	247	832
	A大	122	
	N大	317	
	C大	146	
女	N大	94	378
	S大	154	
	T大	45	
	C大	85	
		計	1210

対する因子分析の結果にほぼ対応していた。そこで久世ほか（1987）に基づいて尺度化した。それらは「規範意識」、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」、「自分の感覚や実感の重視」として尺度化される。内訳は、規範意識（第1尺度）が17項目、身近な事象への関心・社会的事象への無関心（第2尺度）が8項目、自分の感覚や実感の重視（第3尺度）が10項目からなる。

それぞれの尺度の信頼性係数（ α ）を示したのが表3である。 α 係数は.69～.85となっており、内的整合性は高いと言える。また、平均値と標準偏差を示したのが表4である。この表によると、第3尺度（自分の感覚や実感の重視）の得点が高く、自分の感覚や実感を重視しているのが分かる。また、大学間の得点を比較したところ（分散分析、Scheffe法による下位検定）、いずれの大学間にも有意な差はみられなかった。

次に、残り二つの尺度について大学間の差異をみてみよう。第1尺度（規範意識）ではN大男子とG大、S大との間、N大女子とG大、S大との間、そしてS大とG大との間で有意差がみられた（すべて $p < .05$ ）。このことから、国立大学生に比べ私立大学生、特にG大学生の規範意識が高いのが分かる。第2尺度（身近な事象への関心・社会的事象への無関心）については、N大女子とG大との間、S大とG大との間に有意な差がみられた（すべて $p < .05$ ）。これらのことから、女子大学生よりも男子大学生の方が得点が高いといえる。

表3 調査Aの各下位尺度の信頼性係数 (α)

	N大男	N大女	G大	S大	男性	女性	全体
第1尺度	.83	.80	.85	.75	.85	.78	.84
第2尺度	.75	.81	.81	.80	.78	.80	.79
第3尺度	.72	.69	.72	.77	.72	.74	.73

表4 調査Aの各下位尺度の平均値と標準偏差

	N大男	N大女	G大	S大	男性	女性	全体
第1尺度	2.89 (.44)	2.92 (.35)	3.21 (.43)	3.08 (.34)	3.03 (.46)	3.02 (.35)	3.03 (.43)
第2尺度	2.86 (.53)	2.70 (.54)	2.90 (.58)	2.72 (.53)	2.88 (.55)	2.71 (.53)	2.83 (.55)
第3尺度	3.99 (.38)	3.88 (.32)	3.93 (.39)	3.91 (.39)	3.96 (.37)	3.90 (.36)	3.95 (.37)

第1尺度……規範意識, 第2尺度……身近な事象への関心・社会的事象への無関心, 第3尺度……自分の感覚や実感の重視

2 調査Cについて

1) 因子分析と尺度構成

因子分析の結果, 固有値の減衰状況から3因子構造をなしていると解釈した。因子分析の結果は, 表5に示した。

第I因子は, 次のような項目に高い負荷がみられた。なお, ()内は因子負荷量である。

- 5. 自分のことに精一杯で, 他人のことを考えるだけの余裕はない (.54)。
- 26. 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う (.53)。
- 8. 結局, 人のことは自分とは関係のないことだ (.52)。

これらの項目内容から, 第I因子は私生活主義の「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」を表す因子と考えられる。

第II因子は, 次の項目に高い負荷がみられた。

- 15. 型にはまらず, 自分なりのやり方で物事に対処していく (.52)。
- 3. 自分で納得のいかないことはしたくない (.46)。
- 30. 結果はどうであれ, 自分で試してみることが大事である (.45)。

これらの項目内容から, 第II因子は私生活主義の「自分の感覚や実感の重視」を表す因子と考えられる。

第III因子は, 次の項目に高い負荷がみられた。

- 34. 子どもは親を尊敬すべきだ (.55)。
- 10. 敬語は大事にしたほうがよい (.53)。
- 31. 子どもは親孝行すべきである (.53)。

これらの項目内容から, 第III因子は規範意識, を表す因子と考えられる。

このような因子分析の結果から, 尺度構成にあたっては因子負荷量が.35以上で, 単一の因子にのみ高いものを選んだ。また, 規範意識や私生活主義・身近な事象への関心・社会的事象への無関心, 自分の感覚や実感の重視一の下位概念として作成した項目にもかかわらず, 因子分析の結果, 作成した下位概念に一致しなかった項目は除いた。さらに, 「7. 授業や会合に遅刻したり, 欠席してはいけない」は, 因子負荷量が.34であったが, 和田ほか(1988)にしたがい, 尺度構成の際には加えた。最終的に, 第I因子は11項目で身近な事象への関心・社会的事象への無関心を表す第2尺度を構成し, 第II因子は11項目で自分の感覚や実感の重視を表す第3尺度を構成し, 第III因子は11項目で規範意識を表す第1尺度を構成すると考え, 合成尺度を作成した(因子順序と尺度順序がずれているのは, 尺度内容を調査Aに一致させたためである)。

なお, 調査Aの下位尺度の項目との関連を表6に示した。この表から明らかなように, 約半数が調査Aと同じ項目となっている。

2) 尺度の信頼性と尺度間関係

各下位尺度の信頼性係数 (α) を示したのが, 表7である。各下位尺度の α 係数の値は, .62~.78となっており, 内的整合性は高いと言える。次に, 男女別に各下位尺度間の関係を示したのが表8である。これを見ると, 3尺度間の相関は女性では無相関であるが, 男性は規範

現代青年の規範意識と私生活主義について

表5 調査Cの因子分析の結果

	因子負荷量			h ²
	I	II	III	
第1尺度(規範意識)				
1. 先輩と後輩との上下関係はいつもまもらなければならない。	.01	-.11	.38	.16
4. 親などの目上の人の意見にはしたがった方がよい。	.05	-.07	.50	.26
7. 授業や会合に遅刻したり、欠席してはいけない。	-.10	.07	.34	.13
10. 敬語は大事にしたほうがよい。	-.19	.09	.52	.31
13. 長男が家をつぐのは当然だ。	.18	-.04	.38	.18
16. 自分の考えと合わなければ、慣習などを無視してもよい。	.16	.33	-.43	.32
22. 日本の伝統や習慣は尊重すべきである。	-.08	-.02	.43	.19
25. この世の中では、義理やしきたりは無くてはならないものである。	.08	-.02	.42	.18
31. 子どもは親孝行すべきである。	-.13	.21	.56	.37
34. 子どもは親を尊敬すべきだ。	.01	.07	.56	.32
45. 家庭では、親がすべての実権を握るのが望ましい。	.19	-.08	.44	.24
第2尺度(身近な事象への関心・社会的事象への無関心)				
2. 働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい。	.42	.15	-.06	.20
5. 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない。	.54	-.02	-.05	.29
8. 結局、人のことは自分とは関係のないことだ。	.50	.02	-.14	.27
17. 自分ひとりが努力しても世の中はよくなるしない。	.43	.01	-.02	.19
20. ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない。	.46	-.04	-.08	.22
23. 戦争や飢餓など日常生活と関係のない問題は忘れがちである。	.35	-.08	.05	.13
26. 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う。	.54	-.14	-.05	.31
29. 政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどろである。	.50	-.12	.12	.28
32. 現状に甘んじ、与えられた範囲内で自分の生活を楽しむ。	.36	-.09	.24	.20
35. 何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている。	.50	-.12	-.04	.27
41. 毎日毎日、あくせくするよりものんびり暮らしたい。	.38	.20	-.01	.18
第3尺度(自分の感覚や実感の重視)				
3. 自分で納得のいかないことはしたくない。	.06	.44	.01	.20
6. 何事も自分で確かめなければ気がすまない。	.05	.43	.08	.19
9. 自分の気持ちをいつわって行動するのはいやだ。	-.04	.42	-.00	.18
12. 世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ。	.16	.43	-.25	.27
15. 型にはまらず、自分なりのやり方で物事に対処していく。	.01	.54	-.15	.31
18. 他者に教えてもらって納得するのではなく、何事も自分で試してみるべきである。	-.03	.41	.08	.18
24. 自分のやりたい事をする時、まわりの人が反対してもやり通すべきだ。	.18	.41	-.17	.23
27. みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない。	.04	.44	-.15	.22
30. 結果はどうであれ、自分で試してみることが大事である。	-.20	.47	.17	.29
33. 流行を追いもとめるのではなく、自分なりのスタイルを大事にしたい。	-.17	.43	.02	.21
42. だまっていると損をするような場合は、必ず発言する。	-.07	.40	.05	.17
残余項目				
11. 興味を持たずに生きるのはつまらない。	-.14	.37	.10	.17
14. 社会とのかかわりを多く持つよりも、自分の時間を大事にしたい。	.35	.24	-.16	.21
19. 学生にとっては、まじめに勉強することが大事である。	-.13	.08	.28	.10
21. 生きていく上で頼りになるのは、自分の経験から得たものだけである。	.35	.16	-.05	.15
28. 自分の考えと合わなければ、親の言うことでもしたがう必要はない。	.13	.38	-.38	.31
36. 他人のことで自分の時間をとられたくない。	.59	.13	-.03	.37
37. 社会のしきたりや習慣にとらわれた生活はいやだ。	.24	.42	-.36	.36
38. 自分の好きなことをやる時、いくら時間がかかっても気にならない。	.09	.41	.03	.18
39. 自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげたことだ。	.63	-.01	-.01	.40
40. 社会の規則やルールにとらわれずに、自由に暮らしたい。	.33	.39	-.22	.31
43. 人が話している時は、真剣に聞くべきである。	-.36	.31	.32	.33
44. 論理や理屈よりフィーリングの方が重要だ。	.25	.17	.09	.10
	2	乗	和	
	4.03	3.46	3.14	

意識と自分の感覚や実感の重視の間に有意な負の相関関係がみられた。

3) 各尺度の得点比較

各下位尺度の平均値、標準偏差を示したのが表9である。

①国立か私立か

私立大学生の方が国立大学生よりも規範意識 ($t=10.53$, $df=1208$, $p<.001$) と身近な事象への関心・社会的事象への無関心 ($t=5.37$, $df=1208$, $p<.001$) が有意に高かった。一方、自分の感覚や実感の重視については国立大学と私立大学による差はみられなかった。ただし、国立大学は一つの大学でしかデータを得ていないことに注意しておく必要がある。

②性差

男性の方が女性よりも身近な事象への関心・社会的事象への無関心 ($t=3.89$, $df=1208$, $p<.001$) と自分の感覚や実感の重視 ($t=2.21$, $df=1208$, $p<.05$) が高

かった。一方、規範意識には性差がみられなかった。

③大学間の比較

一要因の分散分析後、Scheffe法による下位検定を行った。下位検定の結果は表10に示した。規範意識はN大男子はA大、G大、C大男子、C大女子、S大よりも有意に低かった。また、N大女子はG大、C大男子、C大女子よりも低かった。これらは、N大の学生は他の大学生（私立大学生）よりも規範意識が低いということである。

身近な事象への関心・社会的事象への無関心はN大男子はG大、C大男子よりも有意に低かった。また、N大女子はA大、G大、C大男子よりも低かった。これらは、N大の学生は身近な事象への関心・社会的事象への無関心が低いということである。

自分の感覚や実感の重視については、いずれの大学間にも有意な差はみられなかった。しかも、5段階尺度で3.59~3.76と非常に重視しているのが分かる。

表6 調査Aと調査Cの下位尺度の関連

		同じ項目	表現修正	新項目
調	第1尺度	6	5	0
査	第2尺度	6	0	5
C	第3尺度	3	2	6

表8 調査Cの各尺度間相関

	1	2	3
1		-.04	-.13***
2	.06		-.02
3	-.01	-.09	

上段は男性、下段は女性

*** ... $p<.001$

表7 調査Cの各尺度の信頼性係数 (α)

	N大男	N大女	C大男	C大女	A大	G大	S大	T大	男性	女性	全体
第1尺度	.78	.73	.67	.66	.66	.69	.62	.70	.75	.68	.73
第2尺度	.76	.75	.73	.62	.71	.72	.71	.70	.74	.71	.74
第3尺度	.77	.69	.73	.65	.74	.68	.70	.72	.74	.69	.72

第1尺度……規範意識、第2尺度……身近な事象への関心・社会的事象への無関心、

第3尺度……自分の感覚や実感の重視

表9 調査Cの各尺度の平均値と標準偏差

	N大男	N大女	C大男	C大女	A大	G大	S大	T大	男性	女性	全体
第1尺度	3.16 (.46)	3.21 (.38)	3.47 (.42)	3.47 (.35)	3.38 (.34)	3.47 (.40)	3.35 (.35)	3.36 (.37)	3.34 (.45)	3.34 (.37)	3.34 (.42)
第2尺度	2.85 (.51)	2.66 (.47)	3.03 (.50)	2.84 (.39)	3.07 (.43)	2.96 (.49)	2.88 (.45)	2.98 (.39)	2.95 (.50)	2.83 (.45)	2.91 (.49)
第3尺度	3.70 (.41)	3.62 (.35)	3.76 (.42)	3.62 (.33)	3.59 (.38)	3.68 (.39)	3.66 (.38)	3.61 (.36)	3.69 (.40)	3.64 (.36)	3.67 (.39)

第1尺度……規範意識、第2尺度……身近な事象への関心・社会的事象への無関心、

第3尺度……自分の感覚や実感の重視

表10 調査Cの下位検定 (Scheffe)

	第1尺度	第2尺度	第3尺度
Nm-Am	* Nm<Am	* Nm<Am	
Nm-Gm	* Nm<Gm		
Nm-Cm	* Nm<Cm	* Nm<Cm	
Nm-Nf			
Nm-Sf	* Nm<Sf		
Nm-Tf			
Nm-Cf	* Nm<Cf		
Am-Gm			
Am-Cm			
Am-Nf		* Nf <Am	
Am-Sf			
Am-Tf			
Am-Cf			
Gm-Cm			
Gm-Nf	* Nf <Gm	* Nf <Gm	
Gm-Sf			
Gm-Tf			
Gm-Cf			
Cm-Nf	* Nf <Cm	* Nf <Cm	
Cm-Sf			
Cm-Tf			
Cm-Cf			
Nf-Sf			
Nf-Tf			
Nf-Cf	* Nf <Cf		
Sf-Tf			
Sf-Cf			
Tf-Cf			

m…男性, f…女性, *…p<.05

表11 調査Aと調査Cの下位尺度間相関 (N = 802)

	調査A		
	第1尺度	第2尺度	第3尺度
調査A 第1尺度	.84***	-.12**	.01
調査A 第2尺度	.03	.76***	-.10**
調査C 第3尺度	-.13***	.01	.75***

***… p<.001, **… p<.01

3 調査Aと調査Cの関連について

調査Aと調査Cの各下位尺度間の対応関係を調べるために、男女ごと、大学ごとに各下位尺度間の相関を求めた。その結果、男女間、大学間の相関パターンに大きな違いがみられなかった。そこで、全被調査者のデータを合わせて求めたものが表11である。両測定尺度の対応する下位尺度間の関係をみると、3つの下位尺度ともに高い正の相関関係がみられ、両測定尺度の間に一貫した対応関係があることを示している。

考 察

1 新質問紙 (調査C) の尺度構成について

研究にあたって、我々は前回の研究 (久世ほか, 1987) で見いだされたように、私生活主義を2つの側面に分けて考えた。すなわち、「自分自身と身近な事象への関心・社会的事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」である。この2側面は、久世ほか (1987) が指摘するように宮島 (1983) のいう私生活主義の2面に一致する。したがって、規範意識と私生活主義の2側面を合わせて3つの側面から、質問項目を考えた。

すべてのデータをまとめて因子分析を行なった結果、固有値の減衰状況から3因子を抽出した。すなわち、それらは「規範意識」、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」、「自分の感覚や実感の重視」である。「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」は、自分の世界に閉じこもって、他者や社会とのかかわりをできるだけ避けようとする私生活主義の一面を示しており、「自分の感覚や実感の重視」は、信頼できるのは自分の体験や経験であり、行動の基準を自己に置くという私生活主義の一面に対応している (久世ほか, 1987) と言える。

このように、今回の質問紙においても現代青年の社会意識は「規範意識」および私生活主義の「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」からとらえられることが明らかとなった。

2 社会意識の全般的特徴

1) 規範意識

得点をみると、調査Aが2.89~3.21、調査Cが3.16~3.47であり、調査Cの得点が若干高くなっている。この理由として2つ考えられる。1つは、調査Cは調査Aよりも質問項目の表現がゆるやかになったことである。例えば、調査Aの「20.先生には、いつも敬語を使わなければならない」は、調査Cにおいては、「10.敬語は大事にしたほうがよい」となっている。2つ目に、上下関係に言及した項目が減ったことがあげられる。調査Aで

は17項目中8項目(47.1%)含まれていたのに対し、調査Cでは11項目中4項目(36.4%)にすぎない。

また、同じ大学の学生の前回(久世ほか, 1987)と今回の得点を比べると、N大の男女、G大は約0.1点高くなっているのが注目に価する。このことは、調査時点を考えて理解できる。N大とG大の調査時点は前回は1年生の12月から1月にかけてであり、今回は1年生の4月から5月であった。すなわち、同一の調査対象者ではないので、明確には言えないが、調査Aでの前回と今回のN大とG大の得点をみるかぎり、大学に入学後、自由な雰囲気に触れ、規範意識が低くなると考えられるかもしれない。

一方、調査Cにおける大学間の相違をみると、N大の男女学生がともに他の大学生よりも規範意識が低くなっている。N大学は唯一ではあるが国立大学であるので、国立大学生の方が私立大学生よりも規範意識が低いと言いかえることができる。これは久世ほか(1987)に一致し、さらに家庭、学校、労働・人生観という3つの領域に分けて規範意識を調べた久世ほか(1986)にも一致している。この理由としては、入学してくる学生自身の相違に求められる部分と入学してからの大学の学風に影響される部分の両方が考えられるであろう。

2) 私生活主義

①身近な事象への関心・社会的事象への無関心

調査Cにおける得点を比較すると、国立大学生よりも私立大学生の方が、また女性よりも男性の方が高かった。これは久世ほか(1987)に一致している。すなわち、国立大学生よりも私立大学生、女性よりも男性は自分自身や身近な事象への関心が高いことを示している。

②自分の感覚や実感の重視

得点をみると、調査Aが3.88~3.99、調査Cが3.59~3.76とともに高くなっている。しかも、それぞれの大学間に統計的な差はみられない。これらのことは、すべての大学生が自分の感覚や実感を重視しているということを表すものであろう。

一方、性差はみられ、女性よりも男性の方が自分の感覚や実感を重視していることが見いだされた。この結果は、久世ほか(1987)と一致する。この結果は言いかえると、女性が自分の感覚や実感を重視しないのではなく、今の世の中では男女平等と言われながら、まだまだ女性は自分の気持ちを素直に出せず、自分の利益を守るための主張ができないということかもしれない。

3 調査Aと調査Cとの関連からのまとめ

本研究の目的は、現代青年は本当に自分の感覚や実感を非常に重視するのかどうかを確かめることであった。その際に、私生活主義をこれまでの研究でもれていたと考えられる無力感、見通しの無さ(なりゆきまかせ、安易への傾斜)を「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」の中にとりいれて概念化した。性別や在籍する学校による相違からみた結果、前回の調査(調査A)において見いだされたのと同様の結果が今回の調査(調査C)においても見いだされた。

以上のことから、現代青年の特徴として、第一に自分の感覚や実感を非常に重視するということがあげられよう。

文 献

- 久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・和田実・後藤宗理・浅野敬子・宗方比佐子・大野久・内山伊知郎・鄭曉齊
1987 現代青年の社会意識に関する研究 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 34, 25-39.
- 久世敏雄・宗方比佐子・和田実・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・大野久・内山伊知郎・鄭曉齊
1986 現代青年の社会意識 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 33, 291-302.
- 風間大治・秋山登代子 1981 現代の青年像—70年代を中心とした青年の意識変化— NHK放送文化調査研究年報 26, 1-58.
- 宮島喬 1976 社会意識研究の発展と現状 見田宗介(編)「社会学講座 社会意識論」 東京大学出版会 Pp.163-201.
- 田中義久 1976 社会意識研究の現実的課題 見田宗介(編)「社会学講座 社会意識論」 東京大学出版会 Pp.203-253.
- 吉田潤・荒井宏祐 1982 青年の意識—1972~1981— NHK放送文化調査研究年報 27, 171-224.
- 和田実・久世敏雄・鄭曉齊・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義(1) 日本教育心理学会第30会総会発表論文集, 546-547.

(1988年7月27日受稿)

ABSTRACT

Consciousness of the Norms and Privatization in Modern Adolescents

Toshio KUZE, Minoru WADA, Xiao-Qi ZHENG, Keiko ASANO,
Motomichi GOTO, Katsumi NINOMIYA, Shuji MIYAZAWA,
Hisako MUNEKATA, Ichiro UCHIYAMA, Kenji HIRAISHI and Hisashi ONO

The purpose of this study is to clarify the social consciousness in modern adolescents from two viewpoints of consciousness of the norms and privatization (focusing on his/her own life). Kuze et al (1987) also investigated it from the points of view and clarified that modern adolescents lay special emphasis on their own senses. But in conceptualizing privatization, apathy and lack of perspective in future were not included. So a part of concept in privatization were corrected and whether the similar results as that of Kuze et al (1987) were obtained was investigated.

Now, the questionnaire by Kuze et al (1987) was indicated as Q-A and the questionnaire in this study, as Q-C. The subjects in Q-A were 802 undergraduates (557 boys and 245 girls) and in Q-C, 1210 undergraduates (832 boys and 378 girls).

Factor analysis revealed that three factors existed in the social consciousness in modern adolescents. Factor I was labeled "respect for the norms", Factor II was labeled "focusing on his/her own life vs. indifferent to the social affairs", and Factor III was labeled "emphasis on one's own senses".

Overall, the similar results were obtained from Q-A and Q-C. That is, it was reconfirmed that the primary characteristic of modern adolescents was to lay special emphasis on their own senses.